



今日を生きるわたしたちの物語

飯泉 菜穂子

民博 人類基礎理論研究部

「盲ろう」を生きる人びと

視覚と聴覚の両方になんらかの障害を併せ持つ人のことを「盲ろう者」と総称する。映画「もうろうを生きる」は宮崎、宮城、広島、東京、神奈川、新潟（佐渡）で暮らす、さまざまな世代の盲ろう者八人と彼らを取り巻く人びとの日常生活を丁寧に取材した、世界にも類例のないドキュメンタリー映画である。

厚生労働省によれば、二〇一八年現在、日本には概ね一万四〇〇〇人程度の盲ろう者がいると推計されるという。一口に「盲ろう」といっても、その見え方（見えにくさ）や聞こえ方（聞こえにくさ）の程度、障害の発生順などによってさまざまなタイプがある。盲ろう者のなかには、知的障害や運動障害を併せもっている人（重複障害者）もいる。盲ろう者の用いるコミュニケーション方法は個別に違うといってもよい



話し手が手話をあらい、盲ろう者がその手に触れて読み取る「触手話」で会話する村岡美和さんと村岡寿幸さん夫妻

くらいで、じつに多様。必要としている支援のありようもまたさまざまである。盲ろう者のコミュニケーション支援については、視覚障害・聴覚障害をもつ当事者が、自身のもつ点字や手話の能力、何よりも当事者の理解を活かしてかわっていることも多い。

映画の冒頭、年に一度全国の盲ろう者と支援者が一堂に会する全国盲ろう者大会の様子（映画が撮影された二〇一六年度の大会にはおよそ八〇〇人が集った）を映し出すことで、盲ろう者とそのコミュニケーションの多様性、そして「活気」としか表現しようのない、人が集い繋がるときに放つポジティブなエネルギーを写す。

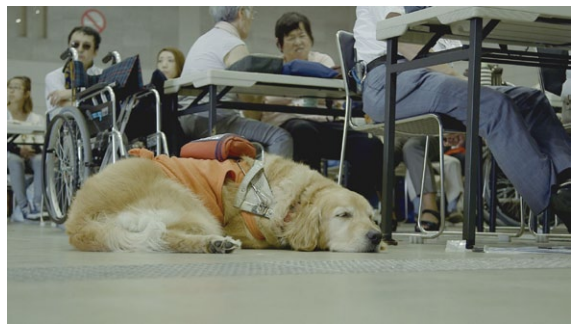
当事者・家族・支援者の紡ぐ物語

「もうろうを生きる」は、例えば、盲ろうと聞いて多くの人がイメージするであろうヘレン・ケラー氏のよいう多くの人の耳目を集める「特別な」誰かを取り上げた作品ではない。声高に何かを叫んだり主張しようとするものもない。映画が描くのは、盲ろうを日常として生きる人と彼らを取り巻く人びと、親であったり、きょうだいであったり、パートナーであったり、仕事仲間であったり、支援者であったり、「あなたの映画を撮りますよ」とやってくる人びとであったり、ある

トフォン・タブレット端末とイヤホンを使って提供している。この映画が「盲ろう」という障害をもつ人を扱った映画だから、「製作後に」バリアフリー「化」したのではない。「バリアフリー」上映を前提として、製作された映画なのだ。

二〇一七年八月の劇場公開以来、今でも全国の劇場で、また関係諸団体や教育機関などによる自主上映が続いている。国内にとどまらず、二〇一七年一〇月にはジャパン・ナントプロジェクトの一環としてフランスのナントで、今年四月にはアメリカのマサチューセッツ州で開催されたアメリカ大陸盲ろう者大会において、六月にはスペイン南部の都市・ベニドゥルムで開催された第二回ヘレン・ケラー世界会議でもバリアフリー版で上映され、大きな反響を得たと聞いている。

本館でも、一月二四日にみんぱく映画会でこの作品を取り上げ、監督・製作関係者を招いてのトークも実施する予定である。是非、多くの方に映画そのものとバリアフリー映画体験を共有していただきたいと思っ



盲ろう者の脇で眠る盲導犬。全国盲ろう者大会にて

「もうろうを生きる」

英題：Living in Deafblindness

2017年／日本／日本語・日本語手話／91分／DVDあり

監督：西原孝至

みんぱく映画会（2018年11月24日）にて上映予定



盲ろう者の指を点字タイプライターの6つのキーに見立てて、左右の人差し指・中指・薬指の6指に直接打っていく「指点字」で会話する。全盲ろうの遠目塚秀子さんと通訳・介助者の岡原直美さん（写真はすべて映画「もうろうを生きる」より。株式会社シグロ提供）

いは、もうそこにはいない、かつて彼らのそばにいた誰かとの「繋がり」だ。

この映画の撮影が始まったばかりの二〇一六年夏（七月二六日）、相模原市の障害者施設、津久井やまゆり園で入所者・職員計四六名が刃物で傷つけられ、そのうち一九名の入所者が命を奪われる事件が起きた。映画はその事実をも淡々と伝える。

全編を見終えて心に残る想いは、命に優劣などつけようがないということ。「もうろうを生きる」人びとの物語は、今日を生きるわたしたちの物語なのだということだ。視覚と聴覚という、外界との情報の窓口をふたつながら閉ざされていたり使いにくいというのは、決して平穩で当たり前、取捨しているのなら「普通の」状況とはいえないのだろう。しかし、それでも、そこに紡がれていく時間はその人にとつての「当たり前」の日常なのだ。その日常は、他者と繋がることで、あるいは繋がっていたという確かな記憶によって支えられている。彼らと繋がる他者もまた、その繋がりによって生かされている。そんなことを思い知らされる。

前提としてのバリアフリー上映

「もうろうを生きる」は通常上映版に聴覚障害者向けのバリアフリー日本語字幕（単なるセリフ字幕ではなく、生活音・環境音・BGMなども文字化した字幕）が付与されている。また、西原孝至監督自身がスク립トを書き朗読も担当した視覚障害者向けのバリアフリー日本語音声ガイドを、スマー